

An aerial photograph of a city, likely in Japan, showing a mix of urban development, green spaces, and agricultural fields. A large red banner is overlaid at the top, and a black circle is at the bottom right. The city is densely packed with buildings, and there are several large green areas and parks. A prominent feature is a large, rectangular, light-colored area in the center, which appears to be a stadium or a large sports field. The surrounding area is a mix of residential and commercial buildings, with some larger industrial or warehouse structures. The overall scene is a typical urban landscape with a mix of built-up areas and open spaces.

I

# 市勢の概要

平城宮跡周辺

# 1

## 沿革

ナラの地名については、『日本書紀』の崇神天皇の条に「大彦命(おおひこのみこと)と彦国草(ひこくにぶく)の軍が武埴安彦(たけはにやすひこ)の軍を迎え撃つため陣を布いたとき、兵士たちが草木を踏みならしたので、その山を那羅山といった」という伝説がのせられています。また、一般に古代人の住居に適したなだらかな丘陵地を意味する平地(なるじ)、平(なら)などのナラとする説や、渡来人の居住地を古代の朝鮮で国を意味する言葉からナラと名付けたことから、ナラの地名がおこったとする説もあります。

ナラには、那羅・奈良・奈羅・柹・平城・乃樂・寧樂などの漢字があてられ、奈良時代の官用には主に「平城」と記述され、平安時代以降は「奈良」が広く用いられるようになりました。

奈良を歴史の表舞台に押し出したのは平城京の造営でした。和銅3年(710年)都が藤原京からこの地に遷されてから70余年の間、奈良は古代日本の首都として栄え、天平文化の華を咲かせました。

都が奈良から遷されると政治都市であった平城京は荒廃しましたが、平城京に建立された諸大寺はそのまま奈良に残され、奈良は社寺の都として生まれ変わり、政治の中心である平安京に対して、南都と呼ばれるようになりました。

東大寺や興福寺が発展するにつれ、寺の仕事に携わる者など多くの人が集まり、寺のまわりに住む人がふえ「まち」が形づくられ、境内地の外にできた「まち」は郷(ごう)と呼ばれ、商工業が盛んになるにつれて新しい郷が生まれました。治承4年(1180年)の平氏による東大寺、興福寺の焼討ちにより、諸郷も大きな被害を受けましたが、両寺院の再建が進むとともに郷も復興し、13世紀には、郷の組織も整うようになり、今日の奈良のもとがほぼ形づくられました。



市街地から若草山を望む

室町時代から奈良の名産として、酒、墨、刀、甲冑、団扇などが知られていましたが、江戸時代になってめざましい発展をとげたのは麻織物を白く晒しあげた奈良晒で、江戸時代初期の奈良は奈良晒をはじめとする産業の町として活気を呈しました。その後、戦国時代の兵火で焼け落ちた大仏が復興された江戸時代中頃から奈良見物に訪れる人が多くなり、奈良はしだいに観光都市としての性格を強めていきます。

明治維新の後、明治4年(1871年)の廃藩置県により奈良県が誕生しますが、一時期堺県や大阪府に合併されたりしたため近代都市化が立ち後れてしまいました。

明治20年(1887年)奈良県が再設置され、奈良に県庁が置かれました。明治22年(1889年)には町制がしかれ、明治31年(1898年)2月1日面積23.44km<sup>2</sup>人口29,986人で市制が施行されると、近代都市として発展する素地や施設が徐々に整い、奈良市は政治、文化、交通の中心となる県都として発展しました。

奈良は幸いにも第二次世界大戦の大きな戦禍を免れ、貴重な自然や文化財を残すことができました。昭和25年(1950年)、「奈良国際文化観光都市建設法」が住民投票の結果を受けて成立し、奈良のもつ文化的、観光的価値を将来に活かした近代都市づくりをすすめていくことになりました。

平成10年(1998年)2月に奈良市は市制100周年を迎え、同年12月には「古都奈良の文化財」として東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡の八資産群がユネスコの世界遺産リストに登録され、世界遺産を活かしたまちづくりをすすめています。

平成14年(2002年)4月には、全国で29番目の中核市に移行し、保健福祉や都市計画などのさまざまな分野で多くの権限が委譲され、これまで以上に主体的なまちづくりに取り組むことができるようになりました。

平成17年(2005年)4月には、月ヶ瀬村、都祁村と編入合併し、本市の大きな魅力である豊かな自然環境や文化遺産を保全するとともに、市民に愛される奈良のまちづくりを推進しています。



和州奈良之図 天保15年 (1844年)

## 2

## 位置および地勢

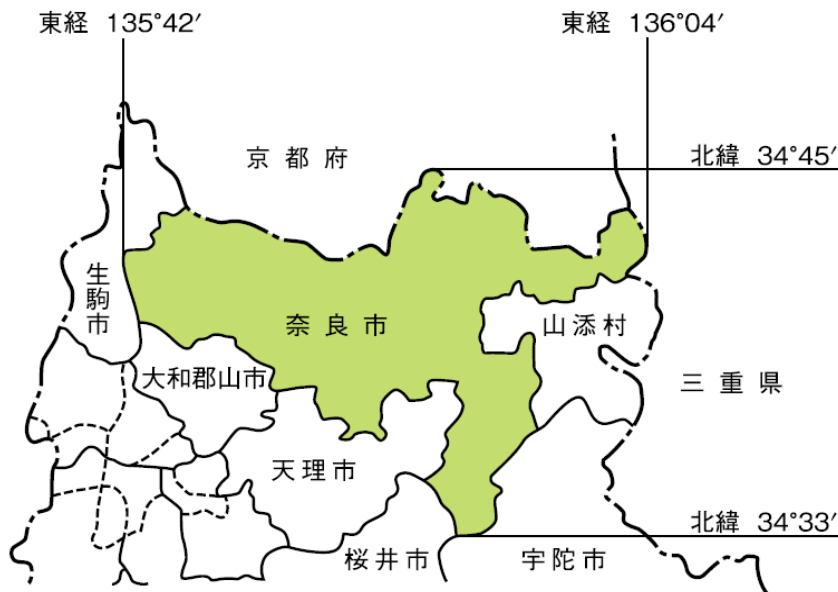
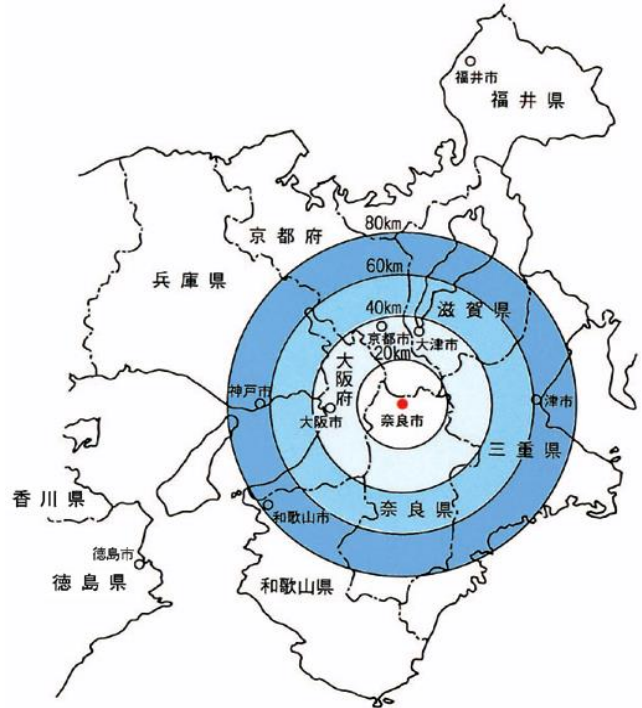
本市は、奈良県の北端に位置し、西は生駒市、南は大和郡山市・天理市・桜井市、東は宇陀市・山辺郡山添村・三重県伊賀市、北は京都府に接しています。

市域は、東西33.51km、南北22.22km、周囲の長さは162.25kmに達し、面積は276.94km<sup>2</sup>で奈良県の総面積のほぼ7.5%を占めています。

東西に長い形をしている本市は、春日山原始林を境に地勢が異なります。

春日山原始林以東の地区は、標高200～600mのなだらかな山地状の地形が広がる大和高原の北部に位置し、布目川、白砂川、名張川などが山あいを北に向かって流下し、木津川に合流します。南端には、大和高原第一の高山である貝ヶ平山(標高822m)をはじめ香酔山(標高796m)、額井岳(標高812.6m)などが笠置山地に連なっています。

春日山原始林以西の地区は、奈良盆地(大和平野)の北端に位置する平坦部で、佐保川、秋篠川、岩井川などが盆地の南部に向かって流下し、大和川に合流します。地区西部には西ノ京丘陵と矢田丘陵の一部が延びていて、両丘陵の間を富雄川が南流し、大和川に合流しています。地区北部は、いわゆる平城山丘陵で京都府南端の丘陵地に接しています。





# 3

# 自然

## 自然環境

本市は、大和青垣国定公園、室生赤目青山国定公園、県立矢田自然公園、県立月ヶ瀬神野山自然公園など美しい自然に恵まれています。

名勝に指定されている月瀬梅林や奈良公園、特別天然記念物に指定され世界遺産でもある春日山原始林、天然記念物に指定されている吐山スズラン群落をはじめとする緑の環境にも恵まれた都市です。

世界遺産をはじめ歴史的・文化的遺産の多くは自然と一体となって形成されているとともに、市街地を囲む豊かな自然環境は本市の大きな魅力であり、奈良の歴史的・自然的景観の基礎となっています。



吐山スズラン群落



奈良公園（飛火野）



春日山原始林



月瀬梅林

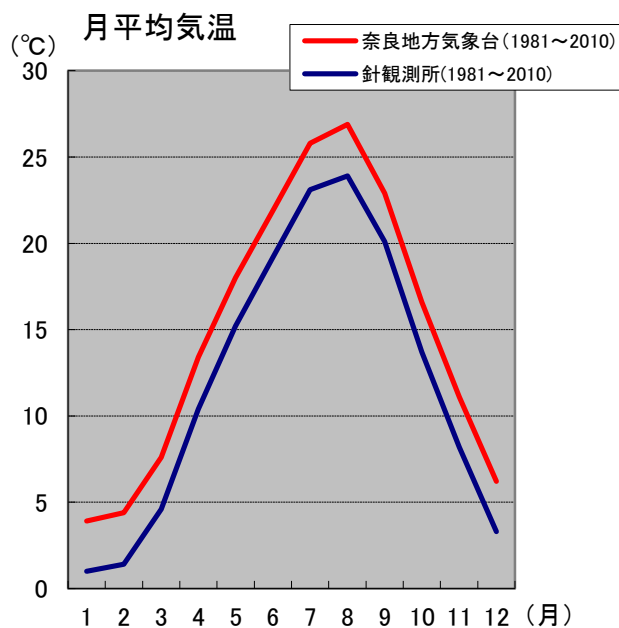
## 気象

本市は、山岳によって海岸から隔てられているため内陸性気候を現しますが、地形その他の関係によって地域的に差異があり、特に奈良盆地地区と大和高原地区との相違が著しいです。

### ■気 温

本市の月平均気温分布をみると、夏は高温で冬は低温と年較差は大きく、大和高原地区は奈良盆地地区に比べ年間を通して2～3℃低くなっています。

最低気温は、奈良地方気象台では昭和52年(1977年)2月16日に-7.8℃、針観測所では昭和59年(1984年)2月20日に-12.2℃、最高気温は、平成6年(1994年)8月8日に奈良地方気象台で39.3℃、針観測所で35.3℃を記録しています。

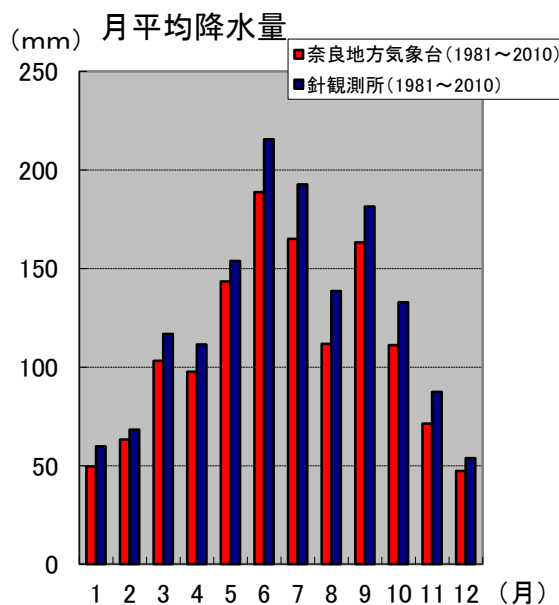


### ■降水量

本市の年平均降水量は約1,300mmであり多いとはいえ、このため、水田灌漑用水の不足を補う溜池が多数つくられています。

月平均降水量は、6、7月の梅雨期と9月が多く、大和高原地区は奈良盆地地区に比べ年間を通して降水量が多くなっています。

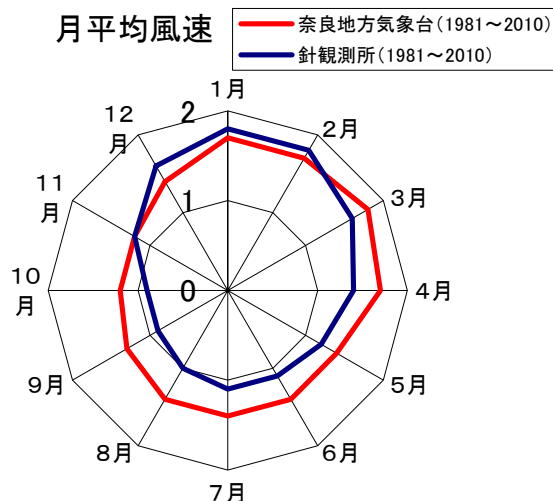
最大日降水量は、奈良地方気象台では昭和34年(1959年)8月13日に182.3mm、針観測所では昭和57年(1982年)8月1日に220mmを記録しています。



### ■風

本市における風の強さは、真冬から春先にかけての期間が最も強く、その他の季節は比較的穏やかです。

最大瞬間風速は、奈良地方気象台で昭和54年(1979年)9月30日に47.2m/s(風向:南)を記録しています。

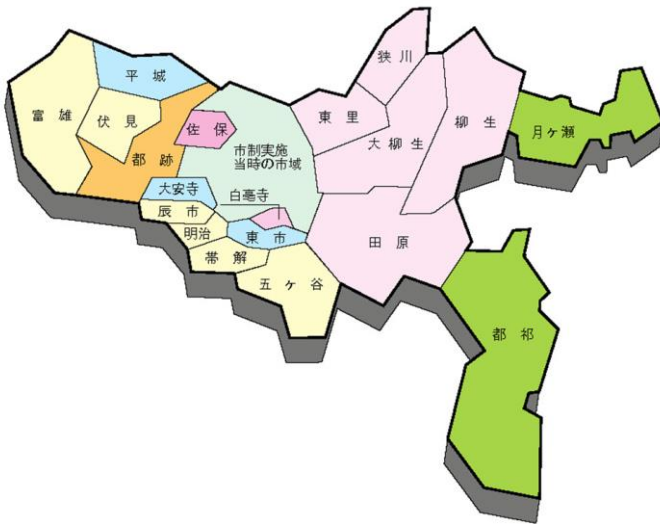


# 4

# 市域と人口

## 市域の変遷

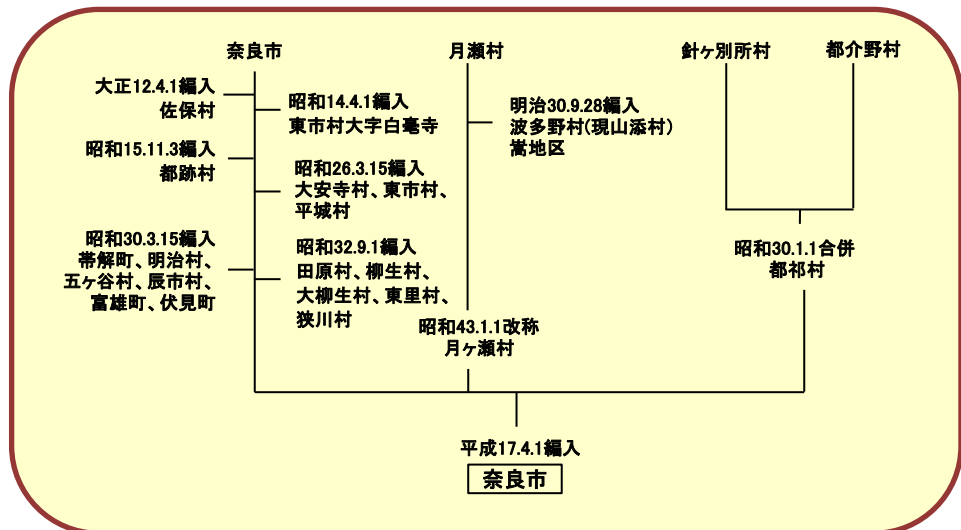
明治31年(1898年)2月市制を施行した当時、面積約23.44km<sup>2</sup>の規模でしたが、大正に1度、昭和に5度、平成に入って1度の合併の結果、現在では市制施行当時の約12倍の276.94km<sup>2</sup>となっています。



◆市村域の変遷

	年次	面積 (km <sup>2</sup> )	比率 (%)	人口 (人)	比率 (%)	合併地区等
1	明治 31.2.1	約23.44 (1.52方里)	100	29,986	100	市制実施
2	大正 12.4.1	約29.92 (1.94方里)	128	44,418	148	添上郡 佐保村
3	昭和 14.4.1	29.80	127	52,918	195	添上郡 東市村 大字白毫寺
4	昭和 15.11.3	39.52	169	59,434	198	生駒郡 都跡村
5	昭和 26.3.15	68.50	292	89,432	298	添上郡 大安寺村・東市村 生駒郡平城村
6	昭和 30.3.15	121.22	517	116,774	389	添上郡 帯解町・明治村・五ヶ谷村・辰市村 生駒郡富雄町・伏見町
7	昭和 32.9.1	210.33	897	129,784	433	添上郡 田原村・柳生村・大柳生村・東里村・狭川村
8	昭和 36.10.5	※211.91	904	—	—	—
9	平成 1.11.10	※211.61	903	—	—	—
10	平成 4.9.1	※211.60	903	—	—	—
11	平成 17.4.1	※276.84	1,181	373,574	1,245	添上郡 月ヶ瀬村 山辺郡 都祁村
12	平成 26.10.1	※276.94	1,181	—	—	—

※ 国土地理院公表面積





# 人 口

## ■人口推移

本市における人口は、明治31年(1898年)市制を施行した当時3万人足らずで、その後、周辺町村との合併が進み、昭和30年(1955年)には10万人を超えています。

わが国の高度経済成長期には、大都市圏への人口移動が生じ、本市においても大阪近郊の住宅適地として、昭和40年(1965年)前後から住宅需要が急増し宅地開発が進み、昭和46年(1971年)から昭和55年(1980年)の10年間には、毎年約8千人から1万4千人の人口増加が続きました。その結果、昭和56年(1981年)には30万人を超え、平成3年(1991年)には35万人となりました。

平成17年(2005年)国勢調査では、約37万人と人口増加を示していますが、これは同年4月1日の旧月ヶ瀬村、旧都祁村との合併によるもので、平成12年(2000年)国勢調査における旧3市村の人口合算数値からは約5千人減少しています。

前回平成22年(2010年)国勢調査では、約3千人減少し、今回平成27年(2015年)国勢調査では、更に約6千人減少しています。

## ■人口集中地区の変遷

昭和35年(1960年)当時、市域面積の約3%の人口集中地区に人口の約半数が集まっていました。その後の人口増加に伴い、平成12年(2000年)には、市域面積の21.7%、人口の87.8%が人口集中地区に集まっています。

しかし、平成27年(2015年)の国勢調査では、人口集中地区は、平成17年(2005年)の合併による行政区域の拡大や近年の人口減少の影響のため、市域面積の16.5%、人口の85.5%となっています。

### DID(人口集中地区)

昭和35年の国勢調査より採用された統計の単位。従来の市部、郡部の別が、正しい都市の性格を示すのに不相当となったために設けられた。都市公園、工場用地、水面等を除いて計算した人口密度が4,000人/k㎡以上で、この高い密度が集団として合計5,000人以上まとまっている範囲をDIDとして区分する。

	面積			人口			人口密度	
	行政区域 (k㎡)	人口集中 地区 (k㎡)	比率(%) <sup>※</sup>	行政区域 (人)	人口集中 地区 (人)	比率(%) <sup>※</sup>	行政区域 (人/k㎡)	人口集中 地区 (人/k㎡)
昭和35年	210.33	6.8	3.2	134,577	66,916	49.7	639.8	9,840.6
昭和45年	211.91	21	9.9	208,266	144,205	69.2	982.8	6,866.9
昭和55年	211.91	36.7	17.3	297,953	245,546	82.4	1,406.0	6,690.6
平成 2年	211.61	44.2	20.9	349,349	297,263	85.1	1,650.9	6,725.4
平成 7年	211.60	44.5	21.0	359,218	309,814	86.2	1,697.6	6,963.7
平成12年	211.60	45.9	21.7	366,185	321,688	87.8	1,730.6	7,008.5
平成17年	276.84	46.44	16.8	370,102	317,301	85.7	1,336.9	6,832.5
平成22年	276.84	45.96	16.6	366,591	308,995	84.3	1,324.2	6,723.1
平成27年	276.94	45.68	16.5	360,310	308,006	85.5	1,301.0	6,742.7

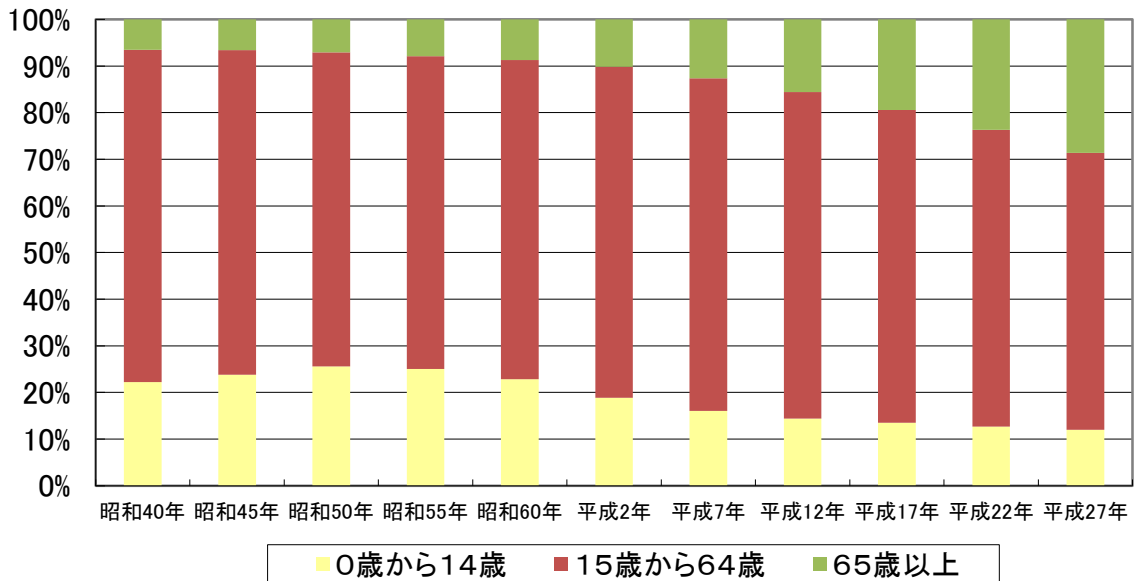
$$\text{※比率(\%)} = \frac{\text{人口集中地区}}{\text{行政区域}} \times 100$$

## ■年齢別人口

市の年齢別人口は、少子・高齢社会の到来により、14歳以下の年少人口が徐々に減少する一方で、65歳以上の高齢者人口が増加しており、平成12年(2000年)には高齢者人口が年少人口を上回っています。

平成27年(2015年)では、年少人口約12.0%、生産年齢人口(15歳から64歳)約59.4%、高齢者人口約28.6%となっています。

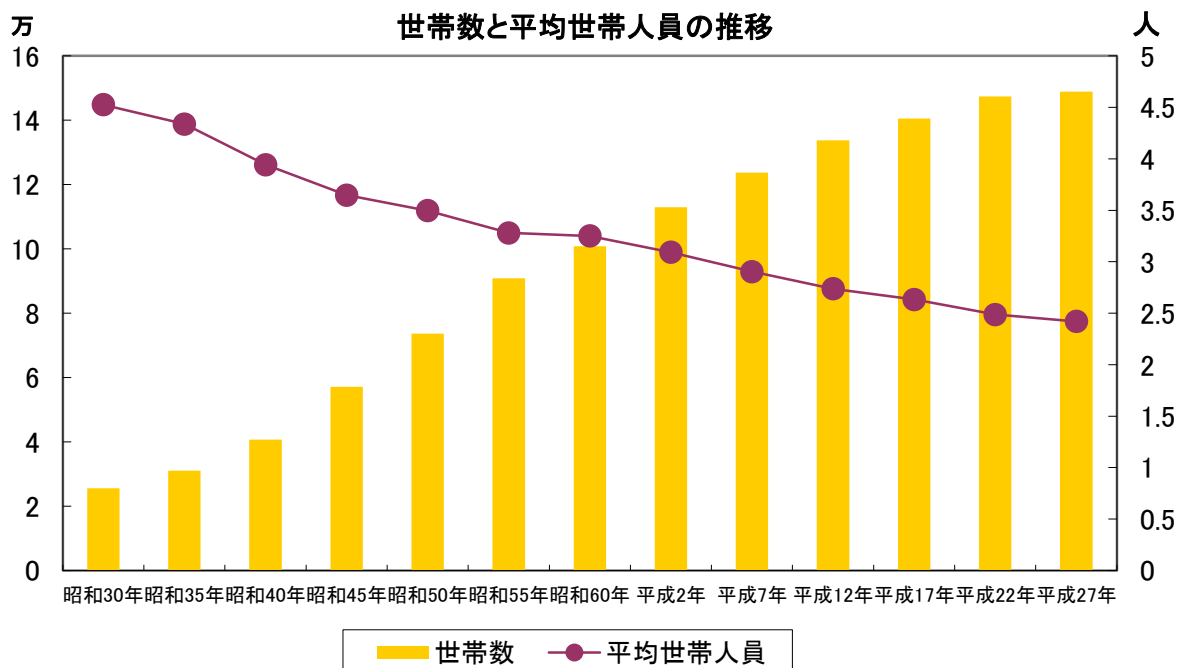
年齢3区分別人口



## ■世帯数

平成27年(2015年)の世帯数は148,920世帯で、市制施行当時の5,613世帯に比べ約27倍に達しています。

また、1世帯あたりの人員は、単独世帯の増加や核家族化の進行等により減少しており、昭和50年(1975年)の3.5人/世帯から平成27年(2015年)には2.42人/世帯に減少しています。



# 5

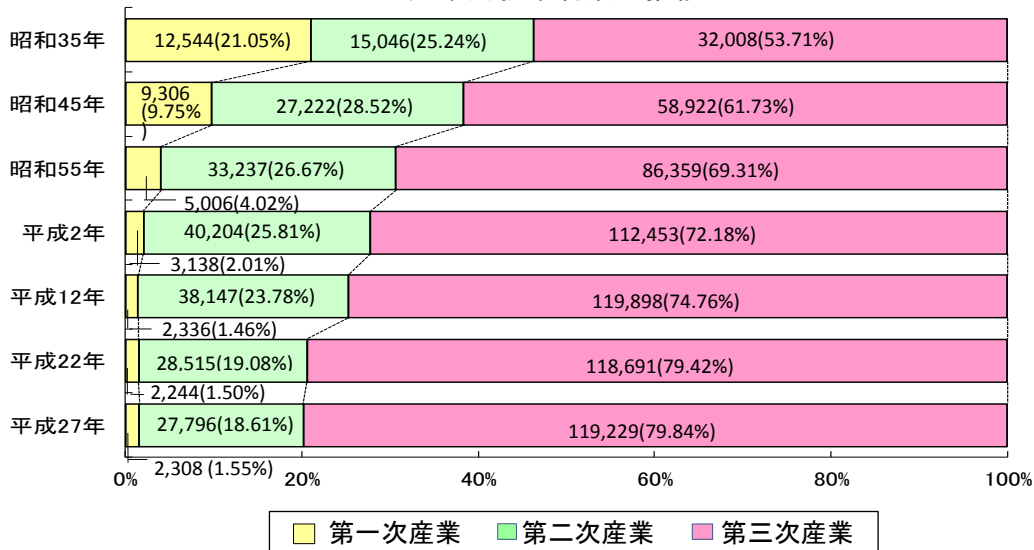
# 産 業

## ■産業別就業者数の推移

本市における産業別就業者数は、近年の産業別動向をみると、第1次産業の就業者数が減少し、第3次産業の就業者数が大きく増加しています。

平成27年時点で、就業者数149,333人のうち第1次産業2,308人、第2次産業27,796人、第3次産業119,229人となっています。

産業別就業者数の推移



## ■製造品出荷額等及び年間商品販売額の推移

製造品出荷額等及び年間商品販売額をみると、昭和47年頃から急激な伸びが見られましたが、平成6年頃から減少に転じています。

平成26年時点で、製造品出荷額等は約1,776億円、年間商品販売額は5,397億円で、県内市町村別構成比は、それぞれ9.4%、29.3%となっています。

製造品出荷額等及び年間商品販売額の推移

